

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 空蝉

挿絵 蒼月しのぶ

エピソード1	怪盗ローズ、今宵も颯爽登場	006
エピソード2	ハート泥棒	035
エピソード3	美しきバラには棘がある	084
エピソード4	咲きかけた蕾の甘い誘惑	115
エピソード5	バラたちの争奪戦	141
エピソード6	怪盗ローズ、最高の獲物ゝあなたのハートいただきますゝ	193
エピソード	怪盗ローズ、今宵も颯爽参上！	249

登場人物紹介

Characters



さおとめ せりか
早乙女 芹香

怪盗三姉妹の長女。普段は花屋を経営、店先で司と遭遇し恋に落ちる。おしとやかで少し天然。

さおとめ いばら
早乙女 荊

三姉妹の次女。名前通りに、姉妹以外の人物に対してはつんけんした態度を取る女の子。

さおとめ やえ
早乙女 八重

三姉妹の三女。甘えん坊で、極度の目立ちたがり。

そうらん つかさ
早雲 司

巷を騒がせる義賊姉妹「怪盗ローズ」を捕らえることに使命を燃やす熱血新米刑事。

「うえあ!! ま、丸出しッ……か、身体が、う、動かなっ」

「んふふっ。特製の媚薬入りバラのハーブ茶を、ちよつと、ね?」

少女の言葉に、司は自分が一服盛られて、その上で下半身をモロ出しにされたことを知る。——いつの間に? それ以前に目の前の年端も行かぬ少女が媚薬などというものを持つているという事実が、どうにも頭の中に浸透してこない。

「あ、わたしがちゃんと調合したんだから、身体がちよこつと痺れるだけで普通に喋れるし、あとは普通の媚薬と変わりないよっ」

(調合っ? この子はどこまで……)

就寝前と打って変わって理知的な色を湛えた八重の瞳に吸い寄せられる。ちりん、と鳴る鈴がはまる首輪に、司の目はさらに引きつけられた。

「そ、それ、首輪?」

動かぬ身体に難儀しつづどうにか視線を彼女に合わせ、たずねる。まるで飼猫のように入懐こく、コロコロと表情を変える怪盗姿の少女に、意識が囚われてゆく感覚。

「うんっ。わたしを、お兄ちゃんのモノにしてもらおうかなって思っ」

細指につつかれ、鈴が鳴る。幼さのおかげで輪をかけて無防備に見える笑顔でしれつと、とんでもないことを告げてくれた。

「モノにするって……。八重ちゃん、どこの本で読んだのか知らないけど、そういうこと

は軽々しく言っちゃ、んむ!!」

だめなんだぞ、と続くはずだった言葉は、柔らかなぬくもりで押しふさがれる。

「んー……つちゆ。えへへ、わたしのファーストキス。お兄ちゃんに奪われちゃった」

ぽっと赤らんだ頬を両手で押さえ、はにかんだ唇をそつと指先でなぞり。いやんいやんと身体をくねらせる様は、ロリータチックな桃色衣装の可憐さと相まって、強烈に男心をくすぐる。それは確かなのだけれども。

（この場合、奪われたというより、捧げた、が正しいのでは……むしろ俺の方が唇を奪われた？）

ほんの一瞬だけ触れ合ったぬくもりはすぐに露と消え。キスの感慨よりも、むしろ刹那的な寂しさを青年の胸に刻ませる。

（いやいやいや！ なに考えてんだ俺！ 相手は子供、芹香さんの妹だぞ!!）

心の中で己にツツコミを入れて、それから改めてベッドの上で顔を寄せる八重をまじまじと見つめる。ほんのりと染まった頬。小ぶりの唇はどちらの物とも知れない唾液でしつとり濡れている。どこから調達したのか怪盗衣装に身を包む彼女が本気なのかお遊びなのかさえ、ころころと変わる気まぐれな表情からは窺い知ることができない。

「お返しに、怪盗ローズ・ピンクが司お兄ちゃんのハートを盗んじゃうんだから」

すっかり巷で評判の女怪盗になりきって、やや芝居がかかった大げさな身振りで大きく、

小さな腕を広げて抱く仕草をする八重。

「ハートを盗むって……」

どうするつもりだ。目で訴えかけた青年に、少女の微笑みが降りかかる。

「お姉ちゃんたちにしたように、八重ともエッチ……するの♪」

幼いながらも明らかに欲情していると分かる、淫靡な、幼さ混じりの禁忌の香りを放つイヤらしさ——。一瞬、大の大人が我を忘れて見惚れるほどに、年下少女の貌は薄桃に火照り、艶めきを帯びていた。

(冗談じゃ、ないのかっ!?)

こんな子供が。媚薬を使って年上の男を、つまりは自分を手籠めにしようとしている。やつとつかめた事態の全容に、背徳的な感情が全身を巡る。そこには確実に甘い衝動も含まれていて、昼間男勝りな次女にいじめられたばかりの股間は無節操にもムズムズと疼き始めていた。

「動けないだろうけど……じつとしてね、司お兄ちゃん。んっ」

ギシ——二人分の重みで軋むベッド。へそ下辺りに跨っていた少女のぬくもりにまた股間が過剰に反応する。反り返り出した肉勃起の向こうで、妙に八重の股ぐらがしつとりと湿っているような気がするの、果たして錯覚なのか。

「んうっ……実は、わたしも媚薬、飲んでるんだ。えへへ、わたしのは痺れ効果つきじゃ

ない、けど……ね」

年に似つかわしくない甘く蕩けたオンナの顔。彼女にも男のたぎりの感触は届いてはらずで、その上で八重は淫蕩に笑み。腰を前後に軽く振り、わざと尻を司の腹筋へと擦りつけ、遠回しに湿り気は気のせいなどではないと教えてくれた。

イヤらしい——年の離れた姉二人より相当に幼いはずの子供相手に抱いてしまった率直な感想に、自分で驚かされる。

(八重ちゃんのアソコがあ、あつたかくて……やばい、勃^たつち、まう……！)

ちりん、と鳴る鈴の音にすべて見透かされているようで、どうしても触れ合う部分から目が離せなかった。見下ろす少女怪盗の潤んだ瞳と視線がかち合い、逃げるように逸らせた先を追われてまた絡まり合う。逃げられない——そう悟らざるを得ないほど、のし掛かる小さな身体のぬくもりと、不釣り合いな妖艶さは圧倒的だ。

視線を浴びてより一層、しっとり濡れた瞳の輝きと、薄くさらつく怪盗衣装の股布越しに触れる少女の股間の湿り気が、また粘つくく、強まった気がする。

「あぐツ！」

ドクリと弾んだ心音と一緒に抑え込んでいた股間のたぎりも弾け、迫り上がり。飲まされた媚薬は効果てきめんだった。

(や、やばい……かもつ)

「んあんっ。すごおい……どんだん硬くなつてくるう」

少女の中のオンナのにおいに過剰に反応し、堪えようと踏ん張る持ち主の意に反して、べたりとくつついた少女の尻肉を押し上げ始める肉棒。

じわじわと忍び寄る肉悦で悶えるその上に、どっかりと腰を下ろした八重の尻が、恥じらいがちにもぞりと揺れた。

「ね。一緒に気持ちよくなる……？ んうっ……」
ずっ、ずりりっ……。

「うあつ、こ、こら。大人をからかうもんじゃ。あ、ああつ」

青年刑事と少女怪盗。双方にとつて、どこかそら寒く聞こえた制止の言葉はあつさりど振りきられ。怪盗衣装の肩口と袖、腰にあしらわれたフリルがフリフリ揺らめく。合わせでズリズリと、八重の腰が青年の勃起の上で前後に這いずり始めた。

「どう、かな。気持ちいいでしょう、お兄ちゃん。ううん、早雲刑事さん？」

甘い衝撃がダイレクトに、柔らかな股に敷かれた肉棒へと伝わってくる。ちようど少女のふつくらとした股肉に挟まれるようにして扱かれる幹が、ドクドクとたぎりを溜め込みながら身悶え、歡喜に跳ねた。

水着に似た衣装の生地に触れ心地をもっと強く、亀頭部分でつつくようにして味わってみたい。浅ましくもそんな煩惱が浮かんでは、頑迷な意志を断ち切ろうとする。



ねじ切られる——直感的にそんな恐ろしい想像。なのに厳しく搾り取るように絡みつく膾肉のぬくもりとヒクつきとにほぐされた肉勃起は、萎えるどころかますます素直に硬く反り返り。狭い膾肉にお返しとばかり、強い脈動を響き渡らせる。

宿敵の女怪盗たちに囲まれるという好条件。なのに自分は何をしている——？ 自虐に溺れた青年の心を、ジワ、ジワと快楽の波がにじむように侵食し続け、どんどん司の意思は呑み込まれていった。

「く、ああい……はッ、はウ……。あはあ♪ ほら。お姉、これで顔を突き合わせて話せる、ううっ……あはううっ」

汗のにじむ手袋越しの手のひらを青年の胸に左右揃えて突き立て、ゆっくりと起き上がらせた瞳に、爛れた肉欲の炎がメラメラと宿る。再び、司の頭上側でベッドの端に胸を乗せるようにしていた姉と、脈打つ肉勃起を啜えたままちようど百八十度回転した妹の視線が真っ向からかち合った。

「……もう、本当に意固地なんだから」

姉の言葉を逆手に取ったことで満悦の笑みを浮かべる妹に対し、少し拗ねたように口を尖らせた姉怪盗。それでも一瞬で微笑を取り戻した白い怪盗の、レオタードをこんもり盛り上げた二つの肉鞠がたぶんと弾む。前屈みなせいでよけい際立つ深い谷間。芹香にも負けず劣らずの豊乳に自然、牡の目線は釘付けとなる。

「こ、こらへボ刑事。せつかく向き合ってたんだから、お姉ばっか見てんなつ、んんッ！」
(う、ひッ、またギチギチッ……!)

股間からの鋭い快楽衝動に、こめかみの奥がズキズキと甘く疼く。それでも頭上の白レオタードから目は離さないでいる。怪盗を取り逃がさぬため——そんな苦しい言い訳を、妹怪盗の手のひらが乗る胸の奥で考えながら。

「そうねえ……。それなら私……。刑事さんのハート、盗み返しちゃおうかしら？ えいつ」
搾り取られる青年と、挑戦的な眼差しをやめない妹をそれぞれ見やっつてから、ゆつくりと白い膨らみはほふく前進で白いシーツの上を這い進み——むにゅ！

「んぷ!? な、なんらこふえ……。ふぐぐ」

一気呵成に接近した白生地顔面に顔を押し潰され、司は反射的にくぐもった声を上げた。
「や、あつ……。おっぱいの谷間で喋っちゃ、くすぐりたい、ですよ」

白怪盗の言葉に、ようやく自分の顔が幸せな状況にあることを理解する。仰向けの顔を二つの特大乳布団の谷間に挟むようにのし掛かれた、俗に言う「ばふばふ」状態。

息苦しくも、凶悪な柔らかさに包まれた顔の筋肉は総崩れ。押し当てられる布地のすべすべした質感。さらにツンと左右に一つずつ、硬くしこった大きめの突起に頬の辺りをくすぐられ、一気に血が上った頭がぼおつと喜悦に霞んでいく。

「くッ、ずりいぞお姉っ。おっぱいで誘惑なんて！」

相変わらずギチギチツと男根を締め上げながら、自分のことは棚に上げての妹の放言。

「それじゃあ……競争しましょうか。私と貴女。どっちが刑事さんを気持ちよくさせられるか。……ふふっ」

対する姉は泰然自若^{たいぜんじやく}として動じず。にっこりと淡いルージユの遊ぶ口元をほころばせ、乳の下の青年と真正面の黒怪盗、両方に聞こえるように艶然と告げた。

「上等っ、受けて立つよ、んっ……負けないんだ、からあっ」

直接性器同士でつながっているアドバンテージゆえか。威勢よく応じた黒怪盗は髪留めリボンを震わせ、倒れ込むように青年の胸元に頭をすり寄せ抱きついていく。

（お、俺の意見は……無視なのかよおうツ!! うツ、あああああつ……!）

また室内を埋めた甘いバラの臭気に、たちまち青年の意識はグツグツ煮えたぎる欲望の充足地——股間の肉棒一点へと強制集中させられてゆく。倒れ込む際に深く突き込まれた肉の突端で感じた、子宮口のコリコリ感に膨れた甘い衝動が先走り汁となって吹き漏れた。「ねえ。司くん。私のおっぱい枕は気持ちいいですか？」

「ふがふがふが（き、気持ちいい）……」

もはや動かぬ四肢と欲望に溺れた思考回路では反抗の氣勢すら湧き上がらず。たっぷりの乳肉を包んだ白レオタードのすべすべとした肌触りと、生地を通して伝わる圧倒的なポリウーム感に、わずか一瞬取り戻しかけた職への責務感情はたちまち、顔の筋肉と一緒に



ふやけて消える。

「ちつ。こつちだつてなあ……んツッ！　ンうふツ！　くうああ……。お、奥までえつ、子宮でチュー、してやるつ……！！　へ、へへつ、つふわああああ♡」

ずぢゆるうううう！　ぶぢゆ！　ぢゆ、ぢゆううつ！

膣肉で勃起をすり下ろすようにガシガシと、がさつ極まりない動きで黒怪盗の尻が弾む。「ツイツツ！　先つぽ、ちぎれつ……くくツツ！」

柔らかくすべすべな白レオタード越しの乳布団のぬくもりに浸り、頭はもうすっかり淫欲で満杯だというのに。

（うおつ、おおおおお！　こ、こんなのが続いたら、あああつ！　俺のちんこバカになる、バカになあああツ……!!）

手でじかに握り締められているかのような格別の膣圧と、情熱的な子宮キスとに襲われる股間の根元からは、ドロドロに爛れた肉欲のマグマが半ば無理矢理に押し出されてくる。黒いコルセットが纏う少女自身の汗で濡れ光るのが、すべやかな乳布団の谷間からほんのわずか垣間見えた。

「んうあああああつ！　ご、ごつんつて先つぽが奥つ、た、叩いたあつんあああツ！」

直後にズブツと深々と沈んだ膣口に肉棒が食らい尽くされ。押しつけられた尻肉の温かみと亀頭への熱烈子宮キスとに、震える尿道を一气呵成に悦びの牡汁が駆け巡る。

「むぐうっ！ んぶぷっ！ んん——！」

ビクッ！ ビククッ！ 射精の切ない予感に腰は繰り返し大きくシートの上を飛び跳ねた。けれど、ぱっくりと開いた尿道口まで至る前に、膨れた幹を締め上げる熱い膈壁により白濁の飛沫はまたせき止められ。どことは構わず掻きむしりたくなるほどのもどかしさが、たちまちのうちに全身に行き渡ってしまった。

「あは……ン、ああんっ！ かっ硬いの、おなか全体で感じるううっ。いいつ、これ、もう手放したくなっ、いイイイっ！」

大きな髪留めリボンを闇夜に舞わせ、黒怪盗が執拗に子宮口と亀頭とを接着、果てはゴリゴリとすり鉢のように己の子宮で亀頭を擦り立てる。

「ひやう！ くすぐったあい……。司くんの鼻息、とつても熱くなって……。妹で昂奮してるの……。少し、妬げちゃいますようっ」

黒怪盗の過激な責めに悶えた青年の吐息を一身に浴び汗ばんだ乳肉の熱気と、つき立ての餅に似たもちもちの感触とが薄いレオタード越しに頬に伝わり、思わず緩んでにやけ面ツンと硬く勃った小指大の左右の突起を、男根の根元に深く根ざした獣欲の命ずるがまま嘔み潰してやりたい——そんな愚考にさえ取り憑かれた。

（だ、出させてくれええッ！）

肉の悦びに。宿敵と交わる背徳に。想い人を裏切る後ろめたさに——。ふごふごと不明

『エピソード6 怪盗ローズ、最高の獲物
～あなたのハートいただきます～』より

——ずぶぢゅうッッ！

「ンいいいああんッ！」

不意打ち気味に押しつけた赤黒い肉の切っ先で、ザラついた粒々が密生する場所に触れた。初めての感触。突くほどにヒダの収縮間隔が狭まり、内部に愛蜜があふれ熱気と潤みが桁違いに跳ね上がって牡幹を濡れさせる。ココ——亀頭でぐりぐり押ししている場所が芹香のGスポットなのだと、言葉で教えられずとも身体が感じ取っていた。

「ひい……あつかひゅうううッ。い、一番弱いところ、え、抉られちゃって……ますうう……。うっんつくふううんんッ♥」

鼻から突き抜ける芹香の艶声。唾液の雫がぼたぼたと腿を打ち、ぐちよぐちよと掻き混ぜられる牡牝の粘性汁から、むわりと酸っぱい臭気がおい立つ。

「う、ああん、お姉ッすごい顔、してるう……気持ちよさそうな、エッチい顔おおっ！」

「荊お姉ちゃんだっつ、ひああッ！ 負けて、ないい……たぶんわたしもっ、すっごくはしたない、顔しちゃってるううッ！」

グチュグチュと淫音の強さを競うように、左右の手のひらの上で踊る二つの尻は激しく前後左右にとくねり回る。

「っ、司くうんっ。おっぱいも、私のおっぱいも愛してくださいっ。せ、切なくてパンパンになっっちゃってるのおお」

背中に回り込んだ芹香の腕に抱かれ、心身同時で温かさに包まれた。突き出されたすべレオタードの谷間に鼻先が埋もれてしまい、思わず窒息しそうになる。スハスハと息を継げば、じつとりと染みた恋人の汗とミルクのように甘い体臭の混じり合った香りが鼻腔の奥まで突き抜けていった。

「や、やわらかひッ……」

「ふあ……司くん専用のおっぱいですから、お、お好きにして、あつあふううッ！」

「せ、せりかふあんッ！ んんっんぢゅぢゅううッ！」

言われるまでもない。くぐもった声を絞り、衝動に駆られるがまま、間近の白生地ごと柔乳肉にかぶりつく。

「ひゃ……あんッ！ いひいッ、司くん、まるで赤ちゃんみたあいつ……ンッくふああ！」

おとがいを反らせた芹香の顎から滴るよだれと汗とが司の髪を濡らして散った。青年は気づけぬまま、ヂユウヂユウと夢中になつて薄布越しの女体を愉しむことに没頭する。

（少し、しよっぱい……それにすげえタプタプして、ああ、幸せすぎるっ）

にじんだ汗の味に舌鼓を打ち、窮屈そうに押し込められた豊乳の弾力とぬくもりとを浴びて、頬肉がにやけてしまう。

素直すぎる肉棒はますますガチガチに強張って、潤みの増し続ける膣上部——ザラつくツブツブ痴帯を亀頭でゴシゴシと擦り続けた。泡立つ蜜でふやけながら、自身もこつてり

とした先走りを粘膜にすり込み。電気ショックを浴びたみたいに引き攣れて、芯まで突き抜ける肉の疼きに悶えさせられ。

「おっぱいとアソコっ、一緒に、なんてえっ！ あっあくあああん！ 私、司くんのおいでマーキング、されちゃってるう、うっうあああッッ……はアアん……」

淫靡に鳴く胸の中の女性を、堪らなく愛しく感じた。

ぢゅっぢゅぷぢゅっ！ ぢゅっぢゅぢゅううううう——！

「あっくいイイツッ、おち、ちっ、溶けちゃああんっ！」

快感の恩返しに。顎先で探り当てた右側のポッチを強めに吸い立てれば、健気にツンと突き立って舌先を押し返してくる。

「はあっはぷッ……ぢゅぢゅっ、ぢゅううううう！」

よだれまみれで濡れ光る白地に浮かんだ勃起乳首を、ネロネロとこね回して刺激する。夢中になって吸いついて、年上女性の濡れた唇から甘い艶声を引き出していく。

「な、なんだか司くん、ああくっ、赤ちゃんみたい、いいいっ！」

——ぢゅううううっ！ ぢゅばッ！ ぢゅッ！ ぢゅぢゅぢゅぢゅずううう！

（もっと、芹香さんの声が聞きたいッ……ち、ちんこに響く甘いつ、声えええっ！）

小指大にまで隆起した乳首を責めるその都度、膣内がドロドロに蕩けて無数の細かなヒダに肉幹全体が扱かれる。まるで、もっと奥へ来て……と誘うようにザワザワと蠢く粘膜

のねっとりとした歓待に、牡の獣欲は栓を失くしたみたいにだだ漏れていった。

「す、げっ……お姉のレオタード、司のよだれでベトベトお。デカ乳と、ちっちゃなポツチがくつきり浮かんで、ひあうっ……エ、エツチすぎいいっ」

グチグチと、ヒモパンの隙間から淫らな音を聞かせて、荊が鳴く。彼女の漏らす粘性汁に浸った右手指はとうにふやけ、指の谷間ではネッチョリ糸が引いている。

「い、荊お姉ちゃんの腰振りだっつ……ひやああんっ、エツチだよ、おおっ！」

そう言う八重の腰の動きも負けず劣らずの激しさで。細い腰をダイナミックに前後に揺すって、さらつく蜜で濡れそぼり、濃いピンクに変色した股布を擦りつけてくる。

激しい摩擦でよじれ、脇に寄せられたナイロン生地のスベやかさと、濡れて小さく開いた肉ピラのプニプニとした弾力との差異に否応なく牡の意識が持つていかれてしまう。

（姉妹でも、やっぱだいぶ……っふ、違うんだ……）

右手のひらの上の荊の股間は、日ごろ見事なキックをくれるだけあって見事に引き締まっていた。余分な肉のまるでない下腹部と、尻や腿肉のむっちり肉の詰まったしなやかさとの対比が堪らず男心を刺激する。

左手の上の八重の性器は、姉と比べてどうしても未成熟な感じは否めない。肉づきも一番薄く、小陰唇が大陰唇の内側にこぢんまりと収まったままヒクヒクと蠢く様子は、幼さと妖艶のアンバランスな魅力をかもし出すことに成功していた。

(ああ、見たい。触れるだけじゃなくて、やっぱじかにこの目で……)

叶わぬがゆえに、煩悶と昂奮は相乗して盛り上がり続ける。

「もつと、チュウチュウしてくださいっ……ドキドキがっ止まらなくなっうあぁんっ！」

——ぢゅぢゅぢゅッ！　ぢゅうぢゅうぢゅばぁっ！

懇願が言い終わるよりも先に、身体が乳首の求めを感じ取って動いていた。すでによだれでドロドロの薄布はあつてなきが如し。転がすたびに硬さを増す乳頭の舌触りを鮮烈に覚えつつ、なおも己のおいを彼女の身体に、衣服に染みつけていく。

「うぶうっ、ひ、ひまるううっ！」

乳谷にうずまつたままの唇と、肉ヒダに犯されるがままの股間から同時に、自然と愉悅が漏れ出た。

奥へ奥へと肉ヒダのうねりにいざなわれて、求められるがままに歓喜の脈動が響く。ドブドブと開きつばなしの発射口が濃厚なカウパー汁を漏らすと、丸い亀頭を食んだ子宮口がチュウと吸いついてきて啜り飲まれてしまう。

つながるたびにこなれて具合のよさが増す肉壺を、飽くことなく味わいたいと、素直に思った。

(うあぁあつ……やばいつ。ちんこが痺れてツ……イッてるのか俺えっ……!!)

跳ね上がる心拍とひっきりなく悶え狂う男根の脈動とが混濁し、常時射精をしているか

のような感覚に青年の意識は陥っていく。

——実際、少量程度は先走りに混じって子種も、潤いに満ちた芹香の膣内で漏らしてしまっているのに違いはなかった。

「は、はぶっ……ぢゅッぢゅぢゅづづッ！ づぞるりゆりゆるるるううう！」

子宮キスのお礼代わりに、顔に押しつけられた白レオタードの膨らみを左右交互でなめしやぶつてやる。すでによだれと汗とでドロドロになっっているのにも構わず、染み込んだそれらを吸い出すように強めに唇を吸いつけると、塩辛い汗の味わいが口中に広がっていく。

「こ、こら、司あつ。こっちも……あたしの方も……！」

はつきり口に出して構って欲しいとは言えない荊が、フリフリと右腕の上で尻を振った。その中心で、指先になにやらヒクヒクと蠢く感触が当たるのに気づき。

（なんだ、これ……？ うおわああ!!）

——ぬぢゅるッ！

「ひふあ!! やつ、そ、そこおおおッ！」

「ゆ、指が吸い込まれるッ!!」

ヌルヌルと滑った右手中指がシワの寄る肉穴——荊のアナルへと触れ、男女双方の素っ頓狂な声が響く。

直後。瞬き一つする間に、蠢く肛門に引き込まれるように指がねっとり熱い肉筒の中へ

と吸い込まれてしまった。

「あくう、やつ、早く、は、ああああ……！　ぬ、抜いてええつ！」

「うアツ！　つて言つても、き、きつうつ!!」

幼馴染の言葉とは反対に、指を唾えた尻穴は鍛えた括約筋を駆使してギチギチと締まり、粘つきだした腸液を足してもたやすく抜け出せそうにない。

「んふふ……あん、ね？　荊お姉ちゃんはある、お尻が弱いんだよ……。あふううつ……」

八重の言葉に荊がむきになってきつとにらみを利かせたものの、当の末妹は涼しい顔でいなして再びマンズリの快感に熱中していった。その様子を視認こそできなかつたが、司の胸の内では信じられないという気持ちと、対を成してムクムクと好奇心が持ち上がる。

（荊が……男勝りなこいつが、ケツで感じるって……!!）

尻をほじられた時の蕩けたハスキーボイスを回想し、ドクドクと肉棒がたぎつた。

「んっひううつ!!　あ、ああつ、まだ大きくうつ……つ、司くうんっ♥」

「こんのつ……抜けていってるだろおつ……ひヤツ!!　あひイイツ！　な、なんでつよけいに、おつ奥にイイツ！」

「ずぶツ！　にぢツにぢゆぢゆうつ……」

芹香の驚き混じりの喘ぎに胸蕩かされ、荊の反抗的な声音にますます嗜虐を煽られて、引き抜く代わりに腸内奥へと目一杯、指の根元まで一気に突き入れる。すでにヌトヌトと

した腸液にあふれていたアナルは嬉々として甘えるように悶え、肉筒全体で痙攣しながら指を咥え込んでいった。

思いきり伸ばした中指でツンツンと腸壁をつつけば、たちまちのうちに狭い肉穴は淫靡な熱気に覆われ、前の穴に勝る締めつけて指を食いちぎろうとする。

「ふやああああ！ あつひツ！ ひう！ うくうううンン！ も、もうお尻はやめつ、やああ！ お、お願い、やつ、やめてええ……」

常日頃ではそうそう聞けないであろう彼女の懇願に、青年はアドレナリンで脳が溺れるほどの衝撃を味わう。言葉とは逆に食欲に指を締め上げ、ウネウネ蠢く肛門内部のつるりとした、腔とはまるで違う造形に関心を不得。

違いを確かめるように、芹香のザラつく粒々痴帯——Gスポットを亀頭で擦り上げた。

「んきゅ、ううううんんつ！ やああつ、も、もうつ。司くんの意地悪うう」

健気にきゅうきゅうすがりついてくる腔ヒダのくすぐりに、肉幹が言葉よりも雄弁に悦びを伝える脈動を響かせる。応じてヌルヌルと絡みついてくる柔毛のように細やかなヒダの蠕動に、ドプツとまた濃密な先走りが搾り取られていった。

「つ、司の指でお尻ホジホジされてっ、い、いやあつ、もお、イ、イキそお……っ」

「わたしもおっ……八重もはしたなく腰動いてっ、イッチやうよう、ひやああん♥」

左右の耳朵をくすぐる嬌声が、まるで射精への甘いささやきにすら思えてくる。

(それに、こ、このおっぱい……!)

顎先から顔全体を押し潰されながら受け止めてくれる、柔らかな特盛の肉布団が二つ。どうにも以前に味わった感のある、触れた先からずぶずぶと沈む柔らかさと、健気に押し返してくる弾力の強さに心奪われた。

白レオタードを染み出した湿った感触が、薄布の向こう側で魅惑の豊乳が青年自身の唾液で汚れてしまっているという事実を伝える。卑しい征服欲で、一層蜜汁まみれの肉勃起が硬く、太く腫れ上がる。

「ぢゆるっ! ぢゆるっ、せりかふあんっ……つぶはっ。お、俺もおっ……」

唾液にまみれた乳の谷間から自身の唾液でべつとりと口元を汚して顔を上げる。見上げた恋人の瞳はどこまでも優しく——柔らかな微笑で輝いていた。

「は、あいイツ……イツってくださいッ。いつでも、私のナカでええッ……」

ドクンッ! 膣^{ナカ}内で。たったそれだけのひとことに、牡の生殖本能が煽られ、異常な量の血液が海綿体に集中した。下半身に血が集まりすぎたせいで眩暈がする。それでも腰はひとりでに蜜汁を掻き混ぜるように膣内で暴れ、抜き差しのたびに飛び散った濁液が姉妹の肌を、衣装を汚していった。

「わ、私ももういくうっ……やはあああ! 司くんにも心も盗まれてっ、ひうンッ! すごいのきちやあつ、ツやああああああ!!」

視覚を奪われたがゆえに過敏に研ぎ澄まされる嗅覚を、ばさりと舞った黒髪からのバスの香りが甘く痺れさせていく。

「お姉ばっかずるいっ……次はあたしが挿れてもらう番っ、んんくう！ だかんっ……あひっ、ゆ、指でイクうっ……！」

「三人とも司お兄ちゃんにメロメロにされちゃった、ああッ……ハート、盗まれちゃってるよううう！」

「ハートを盗む」という言葉が、妙に女怪盗たちを連想させる。ちらつく言葉はけれど、じわじわと背筋を震わせ迫り上がってきた、蕩けそうな肉快楽の歯止めとはならなかった。「司お兄ちゃ……んっ、ちゅちゅうっ！」

接着地を探すように数秒惑ったあと。八重の可愛く突き出た唇が左耳たぶへと、キスの雨を降らせてくる。舌を耳孔へと差し入れられ、ヌルリとヌメらかな唾液の感触に、ドグンツと背中から股間目がけ愉悦の脈動が伝わった。

(で、出るうっ——！)

堪えきれぬ肉悦楽の衝撃が股間を突き上がる中。司は甘えるように目の前の白い膨らみへと鼻先をうずめ。芹香の巨乳布団に包まれたまま、左右の手と肉棒に一齐に降り注ぐ三姉妹の熱く蕩けた絶頂汁を味わった——。

「やはおおうっ！ お尻でっ、アナルでなんてえっ……は、恥ずいのにいつやはッ！」

「いッ、イカされちゃつ、あッ……んうううう……!!」

噛み締めた唇の隙間からくぐもつたアクメ声を晒し、常に挑戦的に吊り上がっていた眉根をハの字に下げ、よだれを垂らして荊が果てる。ギチギチと中指を締め上げる尻穴も、ひっきりなく窄まって薄茶褐色の腸液を腸内部にあふれさせた。

汁濡れて艶めく黒コルセットと湿り張りつくヒモパンの間で、形のよいへそとおなかのピクピクと跳ねる、その反対側で。

「あふううんっ！ んっ！ んう！ んつくふ……あやあああつ……」

静かに、八重が果ててさらつく蜜を股下できらめかせた。プシヤプシヤと勢いよく漏れた尿液が尻の下の手のひらで跳ね返り、薄桃の衣装はおるか黒髪のスインテルまでを汚す。取っ掛かりの少ない膣肉全体で司の手のひらを貪りながら、甘ったるい声音で牡の心を蕩かせていく。

そして――。

「うくうおとおッ……！ だつ、もお……ッッ！ 好きです芹香さんッ!!」

小便をぶち撒けた時にも等しい、鋭い快感と解放感を堪えることなく、妹たちの嬌声でますます潤いに満ちた膣内へと遠慮なく吐き出していく。

——どッ……ぼびゆるッッ！

「んはああうううッッ！ ツひ！ あつう、いつ……つ、司くうううん——ッッ!!」



きゅきゅうっ！ 射精と同時の告白に、一層柔軟に優しく肉ヒダが絡みつく。ぴっちり
と己の肉棒型に拡張された肉穴の締めつけに押し出されるように。

「うおおっ、吸い出されるう……！」

搾り取られた子種が一斉に、弾けた。

どぐんッ！ どぐっどぐウッ！ びぶ！ ぶびゅりゆるるるるウウウッ！！

「んあはあああ！ 中でえ……私の中に全部出して、くださ、いイイ……♥」

「……はっ？ ああ！ お姉ずるいつ、司の精子分けるよっ……」

「ぶう……」

むくれる妹二人を尻目に、唾液べつとりの白レオタード越しオッパイをぶると揺すり。
芹香の蜜汁まみれの膣肉はやわやわ肉幹を絞り、ぴったりと龟头に吸いつく子宮は貪欲に
牡汁を飲み下していった。

「お、おふ、うう……」

寄り添う三つの女性のぬくもりに包まれながら。司は背中を巡る快樂の痺れに溺れ、腰
をグイグイと芹香の尻肉に押しつけ続けたのだった――。

「さ、今度はあたしたちの番だぜ。司」

「司お兄ちゃん。早くう」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中

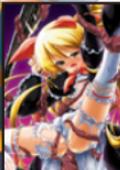


不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!
ちよびのマジな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

白装の騎士
ピルグリムメイデンII

「小説…狩野景 / 挿絵…ぼち」

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩猟者三人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が希望のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

「小説…夜士郎 / 原作挿絵…渡瀬行人」

全国書店で
好評
発売中



「カースイーター」
呪詛喰らい師
「小説…蒼井村正 / 挿絵…或十せねか」



セクシー退魔師が荒ぶる神様をエッチなご奉仕で鎮める伝奇アクション!

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙留字艶戦姫ノブナガシ ①～③
- 悪書期なアダム ①～②
- 純爛帝都少女探偵団、赤い謀略を撃て!

- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバーシ! 交響する美姫と魔姫

- 無敵の姫騎士がMMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巫礼聖女

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!